

は之によりて甚だ此世の人々が其不運なる同胞を處置するの酷なるを感じたり。

潔は何處の渡守とも親しくなりぬ。女島の渡守、其他あそこ、の渡守が家族は皆潔を知りぬ。其初には潔があまりしばく、逍遙して其度毎に物言ひかはし終に親しくなりぬ。潔は始めより親しくならんと思ひしなり。常に此生活の人々に同情ありしなり。佐伯の町に面白き翁あり、いつしか潔の眼にとまりぬ。此翁甚だ貧しけれども、其おどけと勉強とにて、人に愛せられ生活をすごしぬ。此翁甚だ面白き傳記を有す。

潔は同情深き男なりき。彼が同情の心の眼には、人間の意味甚だ幽玄に映りぬ。彼は人々個々を重んじ得たり。これ同情の心あればなりし。此同情の眼には、如何なる人にも、如何なる破屋にも如何なる村にも市にも、悉く高尚にして意味深き、教ある、情ある物語を見出しぬ。

潔の隣家に一家族住めり、一人の母と三人の小兒と甚だ貧しく送りけり。長女は十七歳、次女は十五歳、末は十二歳の男子なりき。母の人はあたかも五十の坂を越えたり。寡婦と孤兒等は八年前其夫たり父たる人を失ひぬ。今は養艱寺なる墓石已にや、黒く染りけれども、たよりなき此遺族は日に貧より貧に陥るのみにて母は精神的に半

ば死にたるばかりなり。長女と次女とは人並なりしも、如何なる不運ぞ、末の小兒は全く愚鈍なりき。潔此家族と相知り、愚鈍の少年は潔に教へられ、導かれ、甚だ進歩したり、而し十三歳の春、忽然として逝きぬ。母は喪心して亦其跡を追ひぬ。今は此家族只だ二人の女を餘すのみ。

潔が見たる所何事ぞ。彼は只だ人を觀たるか、否天を觀たり、只だ天を仰ぎたるか、否、人を觀たり。

不幸の家族、其情誼、不運の小兒、其無心、或は無學の直剛の男或は無智の迷信なれども而も愛情に充つる母、白坪の老婦、陋巷の癡人、其幽思、其運命、潔は詳細に成は大體に之を觀之とか、はれり。而し多く感じ多く自ら苦しみ、自ら喜憂しぬ。

隣家の寡婦、潔に向つて幾度か其不運と悲痛とを訴へたり。潔之に向つて常に言ひなぐさめぬ。

潔は愛の故に愛を視ざりき。善と言ひならされしが故にのみ善と思はざりき。惡とのみ惡まれ慣れし故にあながちに惡と思はざりし也。彼の心はあまりに考究的なりき。淡泊に感動せずして、表裏さまざまに考察して自ら苦悶しぬ。「様々の生活は過ぎぬ。

様々の生活は來らん。」單純なる言語なれども、幾度か潔は自ら唱へて、自ら遊び自ら感じぬ。

潔しばく言ひぬ、吾未だ世を楽しむに至る能はず、又世を捨つるに至る能はず。只だ調子卑き感情の境にさまよふのみと。

潔が家は城山の麓にあり。家の後は崖をなし、崖の上に藪しける。

潮は日々の日記を作りぬ。出来る丈け詳細に書きつらねぬ。其日記は潔のありのままの觀察なり、感情なり思想なり。ざんけもあり、虚榮もあり、空想もあり、潔の誇りもあり、恥辱もあり。彼は只だ其日其日と書きつらねたり。

隣家の寡婦に一男兒あり、斯くして彼を東京に送りぬ。蓋し、彼等一家の者は此男兒が必ず立派なる官吏が教師となり、一家富有の生活に救ふべしと信じ居たりし也。男兒は病死せり。母は驚死せり、姉と弟とは全く貧賤に陥りぬ。

これは潔と呼ぶ人の日記なり、潔の此世を去りたるは二十七歳の春なりき。跡に一冊の日記残されぬ。則ち之なり。

此日記は潔が佐伯より歸る旅中より始まり佐伯を去る前夜を以て終る。佐伯を去り

て間もなく旅に病みて、或る片田舎の怪しげなる旅宿の窓の下暗き雨を聞き乍ら逝きぬ。跡に一冊の筆記のこれり。則ち此日記なり。

すでに日記なり何とて世の所謂著述と比ぶべけん。筆の運びも放逸なり。記す事も入り亂る。文字も選ばず甚だ粗末の文章なり。然るに自ら眞まことの文をなす所以は、ありのまゝの日記なればなり。

さすがに日記なり、支離滅裂のうち、自ら關係あり、聯絡あり、照應あり、日より日、月より月に一個の潔の生ける生命は一貫して現はる。誌されし此事彼事、何の關係なきに似て、潔の眼と心とを通じて自ら聯絡のありて存す。

潔は觀察者なり。物の一端をみて措く能はず。

或日の記

余は此日吾家を出で、はせの道より例の谷を越えつ、道すがら古來の文學者詩人達の事を思ひつゞけぬ。彼等は何を寫したるか何を教へたるか、元來彼等は何者ぞや、彼等も彼等に寫されし人間、及び彼等に教へらる、人間との關係は何ぞやなど色々思を續けぬ。彼等がしばく苦みて或は世を咀ひ、しかも咀ひし彼等は悉く在らずして、

咀はれし世は依然として地の上に轉り行くを思ひ吾も亦はからず此世になけ出されし事かななどひたすらに思ひ續けぬ。頭を擧げし時風一陣杉の暗きあたりを過ぎぬ。寂寥として身の周圍に山谷の氣充ちぬ。吾獨り語て謂ふ、ア、彼等今は何處にあると、而して又思ひぬ、此坂を越してさびしき足音をき、し者幾たりぞ。哀れの少女よ、さなり薪木背負ふ哀れの少女もありつらん。

或日の記

吾已に屢々感ずることあり、村落に入りて、或は土橋を渡り、或は柿の樹の下に立ち、其處の農女を見、彼處の老樵を見る毎に感ずる事のあるなり。

自ら思へらく、吾と彼等との間、確かに何物か挟まれ居るを知る、言ふに言はれぬ隔離を感ず、此隔離は果して何物ならんと考ふれども益なし。たゞ一種の感ありて隔離ある如く思はしむ。吾は如何にもして此隔離を排し去り、農家山屋の人々に接近せまく願ひぬ。肉體は近づきたり、言語は交されたり、されど猶大なる谷は吾等の間に挟まる、也。彼等は吾が住める世界の者に非ず、吾は彼等が呼吸する空氣になる、能はず。言ひ換ふれば、吾自ら吾のまゝにして同時に村の若衆と全く等しき趣味、等しき感

情、等しき思想を續くるを得ることこそ吾が願ひなり。

更に言ひ換ふれば、吾が眼にも彼の鎮守の森の映ることあだかも村の若衆の眼に映る如きを希ふなり。

されど到底出來難き事なり。則ち知る古より同情こまかなる詩人達が農夫野人を見て歌ひし詩も到底是れ詩人の感情にして、たまく農夫野人は其感情の寄托物となりしのみ、農夫野人の眞の生活は決して農夫野人ならぬ詩人に知らる可くもあらじ。

老人、老嫗、少女、妻、貧人、富人、青年、壯年男子、農夫、商人、工匠、樵夫、船頭、孤兒、乞食。

正直者、馬鹿、奸忙、病人、戀愛の兒、善人。

潔が日記は決してあり得べからざる事實を記さず、普通あり得べき事も潔の眼と心に上りて自己の詩趣をなすのみ。

或日の記

夜は次第に更けぬ。ふたりの情は次第にこまかに親しみぬ。話は自から哀れになりぬ。聲もをり／＼曇れり。其時は見かへしては涙のみにき。
『潔さま』老女は言ひぬ。『とても早やわたくしの運はつきました』皺がれし手の甲にて眼こそすりぬ。

此時窓の外さら／＼とさめく如く雨ふりそめけり。

雨降りたる夜の冬の朝、風なくなまぬ、沈靜の朝、白雲元越山の谷をうづむ。

白坪村の朝煙しめりて高く上り得ず、後の谷にこんもりとたなびき、黒く濕ふ藁屋より青き煙ゆるやかに上りて村の上を掩ふ。綿うつ弦の音例の如く聞ゆれども今朝は濕りてきこえ、彼處に一人、二人、彼處の堤の上を二人、三人、村人の行きかふを見る。

老松の馬場の松が枝より墜つる雫は昨夜の雨のなごりなり。田のも、櫛の枝、をちこちの鳥勢なげに鳴く、さすがに冬の朝なり。

砂糖つくる場所に近づけば、若者の小屋のうちに唱ふ聲聞ゆ。少女等の笑ふ聲聞ゆ。牛の鼻息聞ゆ。蟹田の鍛工の前を過ぐれば鐵槌の音己に朝の雲にひびく。

舊の十一月十五日は佐伯の祭なり、五所大明神の御祭なり、此祭は佐伯にとりては甚だ注意すべき價値を有する材料なり。

此祭が關係する所意味する所は決して小少にあらず、試に思へ如何に多くの家族が此祭の媒によりて平生の疎遠を癒し得るぞ、如何に多くの小兒たちが此祭の御蔭によりて其心を新らしき樂の轉じ以て言ふに言はれぬ平和の一生涯の最初の呼吸を呼吸し得るぞ、數百年の古き社の森は相も變らず太鼓の響を重々しく反響せしむるぞ。

人間が其社會的幸福を享有するに就て古も今も何處に至るも御祭なる者の樂にする事如何に多きぞや、是を以ての故に余は其祭を重するなり、其太鼓を聞けば色々の想像を馳せ行くなり。

冬の夜の静けき月の光は今しも風なき下界に滿つるなり。子供たちの笑ふ聲が聞ゆるなり。彼等は明神の方に當りて響く太鼓に胸躍らせつゝ馳せ行くなり、されど隣の彼の子供は行き能はぬなり、なさけなき事かな。

空は曇りけり、風は寒みぬ、冬の空の模様也。されど小兒の胸は春の日の晴れ渡る

彌生の異らす。

是時に余は彼の病床を見舞ひぬ、彼は泣きなき語りて言ふ。

徳藏の墜落

一郎と其妻との自殺

大島尙三の運命、墜落

少女等老ゆる勿れ、吾も老いじ

三好 馬の小兒に對する希望

倉の 落但し其一家の不幸

入野虎之進の命運

横道家の零落と最後の不運

狂人あり。其父之を憂ひ、之を悲みて措く能はず、彼は如何なる道行きを經過して

狂氣せしか。

彼は朝毎に菜園を散歩する彼の家の家妻を見たり、其背に小兒を載せ其顔に朝日の光を受け、其口に小唄を唱ふ。

彼は佐伯の歴史に熱中しぬ。彼は佐伯の近傍を歩みめぐれり。彼は戀に其心を専にせし事幾ヶ月、彼は

彼はふと此人の日々の生活に着目し始めたり、其甚だ萬變一律なるに驚きぬ。今日も、明日も彼はその注意を此人の外形の生活の上に續けぬ。

城山の舊跡は潔に取り、少からぬ印象を與へ、想像を與へ感動を與へ、冥想を與へ、歴史を與へ、古と今と未來とに一貫する想像を與へ、東西興亡の歴史に於ける同情を與へぬ。

秋は城山の紅葉、谷間に、木間の燃え立ちたる炎の如く、朝日夕日に其美を專にす。

冬は喬木の蔭、暗く、樹梢の風すごし。蔦葛、石垣にからみたる、灌木縦横に荆棘舊跡に滿ち、苔、石に白く草は武士の夢の跡をなす。

眺むれば佐伯市街は目下に在り。川流蛇の如く、海洋遠く四國地を浮べ白帆處々に古も今も詩人の幽懷を刺撃す。

忽ち晴れ忽ち雪降る、佐伯近日の天氣也。白雲の大なる哉。蒼空の雲間に見ゆる更に美なる哉。

潔に愛友一人出來たり。此人潔より年若き事五歳、美しき少年なり。心あくまで勇勇しく、情甚たすなほに、學も亦年にくらべて淺しといふ可からず。見識常の少年の上に出づること數十等、されば潔と相見て相知りし以來、互に無二の友となりぬ。潔之を愛する事弟の如く、彼また親しむ事兄の如し。

少年思ひ立ちて郡門留學を志して佐伯を出發するに至れり。潔もとより相談にあづかりたるなり。潔少年と別る、前數日は少年の事のみ想ひやりぬ。愈々、港に送りて彼少年の姉妹達と歸りがけ、いたく天地命運の茫然として眞まことによる所なきを覺え、人

間が其間に生滅して、苦勞經營し、或は會心の友とも別れ、或は慈愛の母とも別れ、以て浮舟に生命を托す。嗚呼これ畢竟何の意ぞ。誰か暴風の彼を海中に葬らざるを知らんや。誰か惡鬼の彼に急病を下すを知らんや。凡てはあやしき命運の手中に存す。しからば人間の此天地の間にかゝる、眞に頼る可きなしと云ふべし。否々神ぞまします。潔は熱涙をのみていのりぬ。勞苦經營豈空ならんや。哀別離苦豈悲しむに足らんや。東を望みて叫び、ア、好少年來るべき聖き運命を喜び。進みてはけめく。

爾、爾の立てる周邊を見よ。爾の生れたる時代を見よ。吾國民の位置を思へ。世界の歴史の指向を思へ。希望あるは吾國民なり、人類の前途愈これより榮えん。爲すべき多く盡すべき多し。仰いで皇天を忘る、勿れ。

旗本の老翁、甚だ奇人、奇なる者の尤も奇なるは、歴史に詳細なることなり。彼の歴史は軍記軍談の仕入なれど、人若し彼の辯舌形容を透して過去の歴史を顧る時は、日本の人民の過ぎ去りし生活の模様など活きくと想像し得るなり。然るに彼れは正直溫和に似て一種の剛直性を有す。

守錢奴強慾ば、彼と甚だ合はず、彼は常に貧窮になき零落になく。
 彼潔に問うて曰く、如何なれば悪人は榮え、善人は苦しむか、人間の世界只だ此れに過ぎざるかと。潔此問に苦む。

潔佐伯にある數月、忽ち嘆じて曰く、嗚呼余も亦己に此周圍に化せられりぬ。嘗て感じたるチャーム今は感ずる能はず。吾も亦此等の人々と共に擾々の生活に入りぬ。

潔未だ友を得ず。老祖母に別る、介然として孤兒となる。戀人と別る、天地の孤客となる。始めて靈魂の不朽と愛の永久を信ぜざるを得ざるに至りぬ、叫びて曰くア、子を失へる親よ。親を失へる子よ。妻を失へる夫よ。夫を失へる寡婦よ。爾等何に向つて滿腔の悲哀を訴へんとはするぞ。死の暗室に向つてか、はてしなき大空に向つてか。天地茫茫として答へず。爾等も亦漸く亡びんとす。爾等亡びて相率るて何處に之かんとするか、生きては無告絶望の魂となり、死しては蛆と塵と空との餌食となるか。嗚呼死せる者豈死なんや。過ぎし者豈過ぎんや。

潔、書して曰く、ア、恐しき哉。見慣れたる蒼穹漸く吾に驚愕の情をみなぎらし來るを覺ゆ。深夜の星斗。

潔、曰く其理想にあくがれ、妄想に迷ひ、或は英雄といひ、或は事業と稱し、歴史と稱し、哲學と稱し、學者と稱し、進歩文明と稱する如き感念のみに形づくられたる世界に住む所の心を轉じて、無智と呼ばれたる、無學と呼ばれたる、生活の爲に生活すと嘲けられたる、故に思ひも付かれざりし農家の民の心持に自らなりて自ら反省し來り更に人間生活なるもの、愈々變妙不思議なるに驚きぬ。

辨當取りの小使の老翁、大聲に曰く、『年をとると釘がゆるんでるますからなア。』

武二は少年と共に茅屋をかりて住みぬ。少年は貧家の生にして木立村の産なり。武二のもとにある六ヶ月にして死す。此少年は武二の無二の友なりし也。姉をいかにせよといふ。

天地の秘密

何故にマルチンルーテルは其友アレキシスの雷死に打たれたる乎。何故に西行法師は其友の頓死に悟りて身を捨てたるか。夫れ人は皆死を覺ゆるに似て實は然らず、滔滔たる衆生悉く死を忘る、彼のマルチンの如き、西行の如き、實に其友の目の前の頓死によりて始めて死なる者の不可思議にして生なるもの、亦た不可思議なるを悟りし也。一方は無類の厭世家となり、一方は宗教大革命家となる。

何故に雷はルーテルに墜ちずしてアレキシスに落ちしか、ルーテルの足下にアレキシスは倒る、アレキシス若し生きて、ルーテル彼の足下に死せしならば、宗教革命は起らざりしか、兎も角も人間と天地宇宙とは不可思議なる命運、人間の如何にもなすべからざる命運の支配あり、歴史も傳記も此中より來るを免れぬ事と言ふ可し。人、天地の秘密に感じ神會、默契する者世間少しとせんや、只之を明顯するの術に精通せざるの多き耳。其術に精通して而も彼の微妙玄通爲者、之を詩人と言ふ、之を

豫言者といふ。

青年少壯の時代

少壯の時代は最も比較す、夫れ只妄想の比較をなす。

少年時代の「妄想」一概に妄想と云ふ勿れ。何故に少年は妄想にふけるや、否抑妄想とは何ぞや、老成人には何故に妄想なきや、否果して妄想なきや。

人間生まれて地に墜つ、玉の如く、星の如し、次第に成長するにつれて汚點罪雲むらがりて附着す。之れ事實なり然り事實なり、然れども、何故に此の如きかを究めよ、かゝる責は何に歸す可き。

「大業」とは如何なる時より發したる思想感情の言語なるか、人間が如何なる程度に迄發達し來りたる頃此觀念は生れしか。而して最も普通に此の觀念は如何なる性質を帶ぶるものなるか、ヴルテレーヤが所謂人類の歴史は血の記録なる其歴史を有せり、吾等人間は如何なる意味感念を此の文字に有するか、大業——大業——大業！これ實に少年時代の警句なりし。

忠ならんと欲すれば則ち孝ならず、孝ならんと欲すれば則ち忠ならず、之れ日本外史を始めて讀み習ひし時少年の單純なる感念を極めて強く動かしたるものなりき。余は平重盛の事蹟を讀みては幾度か單純潔清の心情を動したり、余外史を音讀して實に幾度か泣きたり。

人が其の成長して後に後悔し煩悶する様を研究せんよりも、如何にして少年時代幼年時代に後悔煩悶の種を心中に播かれしかを研究せよ。

一群の男女が心を合せて神を讚美して歌ふを聞けり。吾心をどりぬ。

少年時代を吾はかく養はれたり、吾はかく染められたり、吾はかく形造られたり、吾はかく侵されたり。然れどもア、然れども吾には笛を聞いて泣くの身を持ちラツバを聞いて躍り立つの耳を持ち、花を見月を仰いで恍然自失するの目を有したり。吾には猶ほ天來の心靈全く死せざりしなり。

人間は場合より場合に移り行く盲蛇なり。人間の版圖は時を以て場所を以て制限せらるゝの外知りもつかざる制限を四方八方より受くる者なり。其の制限を看破して之れが桎梏を脱するもの、則ち場合より場合の流轉を免かれて能く己れの足場に永立す

るを得べし。

青年少壯の夢想の題目たる前途の樂。ア、前途の樂みとは如何なる樂みぞ、抑も亦た前途とは何ぞ！吾には前途なし、只だ今日あるのみ、只だ生命あるのみ、只だ心靈あるのみ、只だ心靈の幽音悲調あるのみ、只だ勞働力作あるのみ。

信仰と肉情

人類果して萬世永久を通じて一の目的に向つて走るとせん乎、其の目的は何の目的ぞ、曰く問ふを止めよ、只だ此のまゝに安んぜよと、吾人は屢々此の言を聞く。然れど、之れ終に失望の言たるに過ぎず、然らざれば今日までの「意義」「信仰」「倫理」をば冥冥の中に默認せる也、猶ほ然らざれば彼は酒を以て苦痛を忘るゝと等しく、只日々の習慣に盲目的に服従して終に思を該に及ぼすなく、頭を振り目を閉ぢて何をも視ず何をも云はざる也、其の確然たる信仰の遂に視るべからざるは皆一也。

宇宙は無邊際なり、其の時間無窮、其の空間無限、人間生を此の中に保つ、空間と云ひ時間と云ふも、其の觀念たるに過ぎず。

花あり、光あり、波あり、蝶あり、告天子あり、蒼々の天あり、悠々の地あり、寂寥々あり、音樂あり、人間之れ通じて言ふ可からざる觀念に入る、此れぞ宇宙の眞靈を冥合せるなり、死は只だ肉の亡びなり。生能く此の美、幽、眞なる觀念に入るを得

ば、肉を離るゝも亦た實に此觀念に冥合幽一するなり。

則ち信仰の人は此の死後の觀念に入る、生前此の觀念に入りし度と肉情に入りし度に從つて死後此の聖會に入るを得る度も自ら異なる也。是に於てか、信仰の人と肉情の人との區別あり、進歩の意義も生くる也。

最高の技術は此の觀念に最も多く人を導くなり。

詩、然り、音樂然り、畫然り。

一個人の目的は之れに進むなり。

時代の目的は能く一個人を茲に入るを得しむる也。

則ち肉情の人は死後亦た暗黒に行く也。

吾れ、エマルソンの *The Man is his own star* を唱し而してウォールズウオースのインデペンデンスを読み、而して夕暮に獨り寂寞の境を漫歩して、天の蒼々として限りなきを仰ぎ、時の悠々として窮りなきを想ふ時は、人間心靈の獨立を感じ、齷齪として他の見聞を求むるの念を脱し、日月の永久を走る如く、吾が心靈も亦悠々獨歩して千萬窮りなき天地に住むを感じる也。ア、獨立なる哉、自由なる哉、悠々たる天地なる哉。

唯皮相のみ

余朋友と語るに、余が沈思冥想し、讀書し、感激して得たる思想を語れば、友は常に、然り、實に然りと答ふ、其の様、誠に能く余の意味消息を解し居る者の如し。然れども實は彼等多くは余が眞意を解したるに非らずして、ありふれたる言葉に現はれしありふれたる思想を以て余の幾多の經驗、幾多の沈思、幾多の煩悶によりて得たる思想と同一視せるなり。余は是に於て悟り得たり。余が彼の大詩人、大豫言者達の文字を読んで解し得たりとなす事も、彼れ大詩人、大豫言者達より視れば、實に皮相を撫せるものに過ぎずして神會靈悟に至りては容易に到り難き者なる事を知り得たり。

信 仰

信ずる事、信ぜざる事てふ區別よりも人間は大なり。されど不思議にも大なる人間程愈々堅き信仰を有す。

書籍の知識より冷かに組み立つる信仰は要するにやむを得ざる信仰なり。信仰の光、心に燃ゆる、すべからく、春雨の融くるが如く己に自ら知らず、欺いて自ら知らず、故に孜々一日も安んぜざるなり。力めて眞境に到らんとす、此の熱心は必ず酬いらるるなり。故に眞人能く神韻縹渺の自然の境に到着してあらゆるミステリーミステリーを抱懐して、惑はず。ゲーテが所謂 *Mysterious all, yet all is Good* の大信仰之れなり。余自らかくは推論直覺し能ふと雖も、只だ之れ思想に過ぎざるのみ。心耳を傾けて雄大高壯の天籟を聴く、未だまことに此境に到る能はざるを恥づ。

—了—

二〇八



◀集品小及詩▶

大正九年七月十五日印刷
大正九年七月二十日發行

(定價金八拾錢)

著 作 者

國 木 田 獨 步

發 行 者

佐 藤 義 亮

東京市牛込區矢來町三番地

發 行 所

新 潮 社

電話番町(八〇九番
八九九番)

番二四七一(京東)替振

印 刷 所

東京市小石川區西上河川町
電話小石川五九二番

富士印刷株式會社

印刷者 佐々木 俊 一

■春月小曲集

生田春月氏著

小形天金 定價七拾五錢
極美本 郵送料六錢

多恨多感の詩人春月氏の小曲百八十餘篇を收む。戀を歌ひ、少女を歌ひ、若き日の夢を歌ひ、破れし胸のかなしみを歌ふ。哀切にして可憐、悲痛にして哀婉。日本傳來の原朴なる歌謡の精神と、近代人の鋭敏なる神經とは作者が天賦の詩人的素質の中に融合して此の世にもいみじき抒情詩をなす。ひびきは玉の鳴るに似て、すがたは花の散るに似たり。詩壇近來の一大收穫として注目す可く、わけても、あこがれ心地すゞるなる若き人々の、愛誦おく能はざるものなる可し。

■詩感傷の春

生田春月氏著

二百七十頁 價七拾五錢
中版特製 郵送料六錢

「感傷の春」は傷み易き青春のおもひを盡くして、熱き戀、果敢なきあこがれを歌ひ、「靈魂の秋」は心の秋を歌ひて、青ざめし魂のあへぎを弾ず。共に長曲短曲二百有餘篇を集めしもの。兩々相待つて、青年詩人生田春月の全詩集をなすもの也。

■詩靈魂の秋

生田春月氏著

二百七十頁 價七拾五錢
中版特製 郵送料六錢

歌集 靜まれる樹

金子薫園氏著

中版 定價八拾錢
美本 送料六錢

金子薫園氏の最近の歌集成る。澄み渡れる大空の下、風風ぎて静まれる一樹の、さびしく軒高き姿は、まさに氏が歌の姿なる可し。清純の感覺と、優雅の詩情と、而してその圓熟の極致に達せる技巧と、まことに現下歌壇の最高水準を示すものたり。

■歌集旅情

佐渡、越後、長崎、京都、奈良、紀州、その他飄零のおもひを行く雲に托して、作者が足跡の及ぶ所、そこに新しき歌枕を作れり。

(裝路一浩) 定價八拾錢
送料六錢

■祇園歌集

若く涙多き詩人が京都及び大阪等に詠みしもの總べて三百首。燃ゆるが如き情熱を注いで戀の都を讚す、眞に作者の獨擅境也。

(裝二夢) 價五拾六錢
送料六錢

■東京紅燈集

紅燈華かなる東都の花柳街を歌ひ、名ある歌妓を歌ふ。新作三百首。歌はれたる東京情話にしてまた、歌はれたる東京美人譜也。

(裝二夢) 價五拾六錢
送料六錢

著氏勇井吉

泰西名詩選集

小形特製極美本
紙數一冊四百頁
一冊定價壹圓宛
郵送料六錢づつ

第一編 ■ ハイネ詩集 生田春月氏譯

第二編 ■ ホイツトマン詩集 白鳥省吾氏譯

第三編 ■ ゲエテ詩集 生田春月氏譯

第四編 ■ エルレエヌ詩集 川路柳虹氏譯

第五編 ■ トラウベル詩集 福田正夫氏譯

第六編 ■ カアペンタア詩集 富田碎花氏譯

續刊 ■ バイロン詩集(佐藤春夫氏譯) プレーク詩集(山宮允氏譯)

ツゲルネフ全集

(1) ■ 獵人日記 生田長江氏譯
▼價 貳圓
▼送料 十二錢

(2) ■ ルーヂン(附) 彼等の手紙 田中純氏譯
▼價 壹圓卅錢
▼送料 八錢

(3) ■ 初戀(附) 『フアウスト』
クララミリッチ 生田春月氏譯
▼價 壹圓卅錢
▼送料 八錢

(4) ■ その前夜 田中純氏譯
▼價 壹圓卅錢
▼送料 八錢

(5) ■ 煙 大貫晶川氏譯
▼價 壹圓卅錢
▼送料 八錢

(6) ■ 父と子 谷崎精二氏譯
▼價 壹圓卅錢
▼送料 八錢

(7) ■ プーニンとバブリン
(附) 餘計者の日記、ミシヤ、外二編 布施延雄氏譯
▼價 壹圓卅錢
▼送料 八錢

(8) ■ 處女地 田中純氏譯
▼價 貳圓
▼送料 十二錢

(9) ■ 春の波(外) 生田春月氏譯
▼價 壹圓卅錢
▼送料 八錢

■エルトテル叢書

泰西の高名 總洋布天金極美本
なる戀愛文 定價一冊金八十錢
學の傑作集 送料一冊六錢づゝ

ギヨオテ作 秦 豊吉氏譯 (廿一版)

(1) 若きエルトテルの悲み

若きエルトテルが、美しき、されど既に人妻なるロツテを戀ひて、悲みに胸破れ、自ら殺して果つるまでの、なやみとわづらひとを、書簡體に直叙せる、世界最高名の作。

サンピエル作 生田春月氏譯 (十一版)

(2) 海の嘆き (原)ポオルと (名)ゴルジニイ

南の海の小さき鳥なる椰子の葉蔭に幼なき戀をはぐ、んだ少年と少女とが、浮世の運命に弄ばれて生別に哭し、死別に哭するに至る、あはれ限りなき戀物語である。

ベチ エ作 後藤末雄氏譯 (第七版)

(3) 戀と死 (原)トリスタンと (名)イゾルデ

王女イゾルデは悲しき戀に悶えつゝ、海を越えて嫁ぎゆかうとする、それを送る勇士トリスタンは、媚薬の惑はしに心を奪はれ、遂に死にまでの戀に殉ずるに至つた。

ツルゲエネフ作 衛藤利夫氏譯 (八版)

(4) 薄倅の少女 (附)馬車を (録)待つ間

切なる戀にやぶれ、若うして死せる薄倅の處女を描くに、其獨特とするの靈筆を以てせるもの。言々咽ぶが如く、句々の間に熱涙あり、眞に哀切限りなき物語である。

シヤトウブリアン作 生田春月氏譯 (六版)

(5) 少女の誓 (原)アタラ (名)トルネ

アタラは新大陸の原始の自然を背景として、神に堰かるゝ人の戀の烈しきなやみを描き、トルネは姉と弟とのあやしきも、うつつなき戀心を描く、共に世界高名の傑作。

ピヨルンソン作 三上於菟吉氏譯 (六版)

(6) 森の處女 (原)ジイノオプ、 (名)ゾルバッケン

山の彼方と山の此方とに生ひたつた少年と少女との初戀のあこがれとなやみとを、峰高く霧深き那威山郷の自然を背景として、作者一流の筆に描ける清純の物語。

ギヨオテ作 久保正夫氏譯 (五版)

(7) ヘルマンとドロテア

ライン河畔の一貴公子と革命の難を遁れ來れる美しき佛蘭西娘との戀を描く。華麗にして優雅、熱切にして而も哀婉の思ひほのかなるもの、ゲエテの最傑作である。

メリメ作 布施延雄氏譯 (五版)

(8) カルメン (附)エニス (録)の花嫁

公井須磨子が最後の舞臺に演ぜしもの。濃艶にして放縱、野生のまゝの情熱に活くる唄ひ女が、火の如き戀に身を盡くすの幾情景を描く。極めて異色ある作品である。

ラベ・プレヴオ作 廣淺和郎氏譯 (新刊)

(9) マノンレスコフ

美しくしき虚榮の女マノンと、女の卑しきを知りつゝ、尙ほ不思議の愛に身を焼く青年デクリユウとの、傷ましく悲しき戀の經緯を描ける、佛蘭西の名高き小説である。

新進作家叢書

■中版百六十頁づゝ
 ■一冊價金五拾錢宛
 ■郵送料一冊四錢宛

第一■新らしき家	武者小路實篤	十三■愛と憎み	江馬 修
第二■恐ろしき結婚	里見 淳	十四■土の靈	野村愛正
第三■生あらば	豊島與志雄	十五■無名作家の日記	菊地 寛
第四■大津順吉	志賀直哉	十六■お絹とその兄弟	佐藤春夫
第五■生と死の愛	谷崎精二	十七■赤い矢帆	江口 渙
第六■結婚の前	長與善郎	十八■イボタの蟲	中戸川吉二
第七■暴君へ	有島生馬	十九■不能者	葛西善藏
第八■煙草と惡魔	芥川龍之介	二十■霰の音	加能作次郎
第九■夢と六月	相馬泰三	廿一■歸れる父	水守龜之助
第十■手品師	久米正雄	廿二■修道院の秋	南部修太郎
十一■一つの芽生	中條百合子	廿三■結婚者の手記	室生犀星
十二■神經病時代	廣津和郎	廿四■放浪者富藏	宮地嘉六

終

